

## 〔病・虫害発生概況〕

## 病 害

## 麦類病害

冬季間の乾燥と春の低温のため麦類の病害の発生は全般におくれ、さび病類・うどんこ病などは各県ともその後の発生も低調であつた。とくに赤かび病は麦の生育のおくれが幸いして、出穂～開花期ごろの雨が長続きせず、また収穫期までの好天気によつて、近年にない少発生に終つた。

## 菜種病害

同様に春の低温と雨の少ない天候で、菌核病の発生は近年よりおそく、さらにその後のまん延も著しくなかつた。南北九州ともきわめて少発生で被害が軽かつた。

## 春作野菜類

春作馬鈴薯の疫病は早春の低温乾燥で少なかつた。トマトの疫病およびきゅうりのべと病その他のうり類の病害は、中北部九州では雨の多い時期に当りやや多日の発生であつた。

## 稲病害

## 早期栽培：

苗代の葉いもちの発生は少なく、本田での葉いもちも発生が少なかつた。これは稲の生育初期の気象が低温、少雨であつたためと考えられる。このように初期の葉いもちが少発生であつたので、一部で出穂前やや多くなつたところもあるが、一般には後期まで少発生のみで、出穂後の天候の好転と相まつて穂いもちも全般に少なかつた。

紋枯病は低温で発生がややおそく、南九州では後にやや進展がみられ多めとなつたが、程度はひどくならなかつた。白葉枯病の発生初めは近年並で、生育後期にやや多くなつた。

ウイルス病では、萎縮病は一般に少～並の発生であつたが、鹿児島県ではやや多く、黄萎病は南部九州でやや多かつた。縮葉枯病は全般に発生がやや早く多目、黒すじ萎縮病は宮崎県で近年並の発生があつた。

その他、6月の大雨により黄化萎縮病が発生したところかなりあつた。

## 普通期栽培：

苗代期の葉いもちも低温と生育のおくれのため、後期には多雨となつたにもかかわらず、発生がおそく少なかつた。従つて、本田への病苗の持込みが少なく、葉いもちも本田初期でも引き続き少発生であつた。後期の発生まん延も、梅雨あけの後の好天気によつて、

中部山間の一部を除き全般に抑制された。葉いもちが少なかつたことと、低温による出穂のおくれで出穂前後の天候が悪くない時期になり、しかも出穂後が冷涼で乾燥した気象であつたため、穂いもちの発生はおくれで軽かつた。ただ、一部で後期に枝硬いもちがやや多くなつた程度である。

今年は苗代期の前期および中期に大雨があつたので、各県とも冠水したところで局地的に黄化萎縮病の発生が近年より目立ち、水害のおこつた熊本県ではとくに多かつた。

紋枯病は初期生育のおくれと8月の少雨で進展が著しくおくれ、さらに出穂前後からの低温のため抑制されて、近年にない少発生に終り、被害はほとんど問題にならなかつた。白葉枯病は苗代期後半と本田初期の大雨によつて初期感染多く、発生もやや早かつた。さらに8月の台風によりまん延し、発生面積は近年では大きい方であつた。しかし、出穂後の低温で後期の進展はゆるやかで、被害は比較的軽かつた。

ウイルス病については、縮葉枯病が苗代期から発生多く、鹿児島県を除く南九州とも本田で多発した。後期の発病も中部以北で目立つた。黒すじ萎縮病は宮崎県で並の発生であり、また大分県で初めて発生が確認された。萎縮病は北部および中部九州では近年並程度、南部ではやや多い発生で、黄萎病は北部で並、中部以南ではやや少なかつた。

## 果樹病害

柑橘のそうか病は果実での発生が多く、またかいよう病では夏秋梢に発病が多かつた。

## 虫 害

## 稲作害虫：

ニカメイチュウの越冬幼虫数は、佐賀県を除いて一般に少なかつたが、鹿児島県を除いて体重は重く、死虫率が低いのが特徴である。しかし、佐賀県では越冬幼虫数も多く、死虫率も低く多発生の条件をそなえていた。一般に1～4月は低温に経過したため、北部にゆくほど蛹化時期はおくれ、したがつて発蛾最盛日は移植後に来たものが多く、7～14日おくれた。そして発蛾型も2～3峰を示し、後期発蛾が多いところでは特に念入りに防除する様に注意報が出された。この第1回成虫の発蛾時期のおくれは第2回成虫期まで取り戻すことが出来ず、第2回成虫の最盛日も3～5日遅れた。また、第1世代幼虫の残存虫が多かつた長崎県

や宮崎県では第2世代による被害がやや多く見られたところもあつた。越冬幼虫数は福岡県、大分県、宮崎県、鹿児島県ではやや多く、他の県では平年並かやや少なめ程度である。

サンカメイチュウの越冬幼虫数は宮崎県では広範囲にしかも多く見られた。冬季から春季の低温のため各地とも発蛾時期は遅れ、この影響は後の世代まで続いた。発生量は宮崎県の沿海部では特に多く、熊本県や鹿児島県では第3世代になつてからの多発生と被害が見られ、これらの地方では越冬虫も多いようである。株元到達はやや遅れている。

ツマグロヨコバイの越冬幼虫数は各地とも多く、鹿児島県の南部地方は特に目だつた。そして、12月～1月上旬は気温が割合に高く経過したので一部生育の進んだ越冬幼虫も見られたが、続く4月までの低温で、発育は極端におくれ、第1回成虫は10～14日遅れて発生したところが多く、また発生期間も極めて長くなつた。この現象はそのまま次世代までも続いたため、第2回成虫と第2世代幼虫の多発生が各地でおこり、感染期間の延長も手伝つて、ウイルス病多発の傾向をとつたが、防除対策が行きとどいたために、その後、極端な被害はうけなかつた。そして、その後の世代も多発生を続け、防除の徹底したところでは発生は少なくなつたが、全般的には多く、そのため、越冬虫数も多いようである。

ヒメトビウカの越冬幼虫数は全般的に多く、ツマグロヨコバイの場合と同様に、主として、冬季の気温の影響を受けて、第1回成虫の羽化時期は10～12日遅れ、成虫発生期間も長くなり、この現象が第2回成虫期にも続いたために、第2回成虫の飛び込みは多く、ウイルス病感染期が長いことが予想され、しかも稲の感受性が高いように育つたために、それぞれの県（佐賀、長崎、熊本、宮崎）で防除の警報が出された。そして、佐賀県、熊本県、宮崎県では第3回成虫も多発生したが、その他の地方では、その後の発生は極めて少なくなつた。

セジロウカは全般的に第2～3回成虫の飛び込み数が多く、九州の西沿岸諸地域の多いところでは1灯100万匹を数えたところもあり、各県で防除警報が出された。そして、その後の発生も地区によつて更に顕著になつたため、ニカメイチュウの防除により併殺できなかつた地帯や、多発地帯では単独防除をしなければならなかつた。その結果は殆んど完全に防除さ

れ、実害は殆んどおさずに経過した。

トビロウカは第4回成虫第4世代幼虫期以後になつて、福岡県、宮崎県、鹿児島県で多発生したが、単独防除が行なわれたために、一部の地方で坪枯れ被害を出した程度で、全般的に被害は軽微に経過した。

ミナミアオカメムシは宮崎県では越冬虫の数も多くその後の世代も多発生した。熊本県でもこの現象が見られ近年になく多発生を見たが被害は無かつた。

フタオビコヤガは近年次第に多発生の傾向にあり、8月中旬以降の世代に、各地で多発生が見られるが、実害を出すまでになつていない。

イネヨトウは長崎県、熊本県、宮崎県では発生が多く、第1世代より陸稲、苗代の加害が見られたが、その後の世代もやや多めの発生を続け、天草地方ではかなりの被害を出した。

#### 一般作物害虫：

冬季～春季の異常低温によつて、寒冷を好む害虫の多発生がみられ、ムギ類に長崎県では県下全域にヤノハモグリバエが、熊本県の県北地帯にムギドロオイムシが発生して加害した。アワヨトウは大分県下でムギ類、トウモロコシに被害をみとめたがハスモンヨトウ、ナカジロシタバは九州南部で8月以降多発生し、イモヒナガは10月に入つて急激に増加し、それぞれ防除警報によつて防除した。その他、佐賀県では春季、コナガ、アオムシがかんらん、大分県では秋季にコナガ、ヨトウムシが十字花科そさいにひどく加害した。また、ジャガイモガの被害が長崎県で見られた。

#### 果樹害虫：

鹿児島県、熊本県、佐賀県ではヤノネカイガラムシが第2世代、第3世代に多発生し、鹿児島県、佐賀県、福岡県ではミカンハダニの越冬密度が高く、防除の不徹底な園では7月下旬以降になつて急激に増加し、大きな被害を出した。その他、鹿児島県ではアケビコノハを主体にした果実吸が類が、かなり多く発生し、また福岡県ではブドウにフタテンヒメヨコバイが8月～9月に多発生し、早期落葉の被害が各地に見られた。

#### 茶樹害虫：

鹿児島県では1番茶期にミドリヒメヨコバイとカンザウハダニが多発生し、局部的には異常発生となつた。その他コカクモンハマキが県下全域に多く、防除の対象となつた。